

圓融天皇事記史料百九十二  
十

和書門			
四	一	九	九
冊	函	架	號
冊	架	函	號

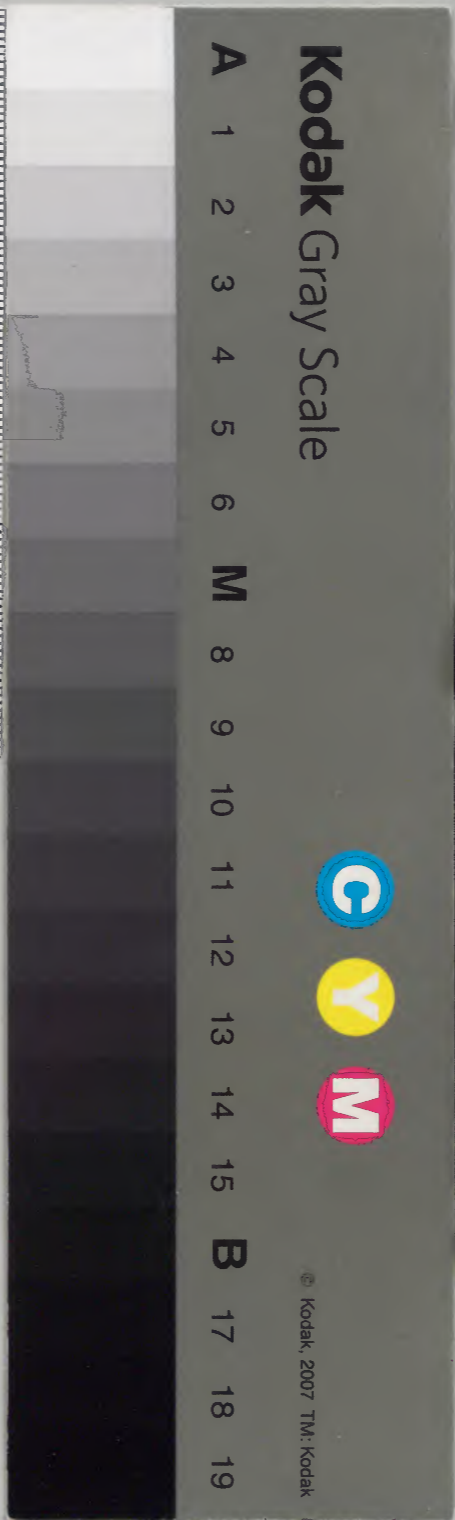
消印

和書  
史  
四〇  
號甲

內閣文庫			
四	四	九	和
冊	〇	九	書
架	九	三	類

(八九一才)

內閣文庫		
番號	和	93
冊數	409(198)	
函號	141	131



史料卷之百九十二

圓融天皇事記第十  
起天元年  
十二月

天元元年戊寅  
正月廿九日改元

高祖正月大丙戌朔

文德天皇節會事

日本紀略云正月一日丙戌改元

二月丁未宮大饗會事

日本紀略云二月丁未宮大饗會事

史料卷之百九十二

圓融天皇事記第十

起天元元年正月

天元元年戊寅貞元三年十一月廿九日改元

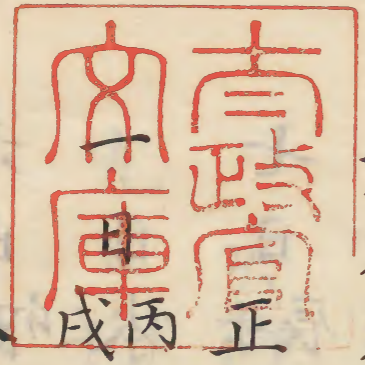
正月大丙戌朔

節會事

日本紀略云正月一日丙戌宴會如恒

二日丁亥東宮大饗事八十七日始入亦雷雨

三日本紀畧云二日丁亥東宮大饗



三日子戌日蝕并雷鳴事

二日本紀略云三日戊子日蝕入夜雷雨

六日卯辛叙位議事

一日本紀略云六日辛卯叙位議

七日壬辰白馬節會事

六日本紀略云七日壬辰節會

權中納言濟時叙正三位事

公卿補任云權中納言從三位藤濟時右近

十 大將正月七日叙正三位

八日癸巳御齋會事

十日本紀略云八日癸巳御齋會始十四日己

十 亥御齋會竟

九日午甲關白左大臣賴忠家大饗事

十日本紀略云九日甲午左大臣家大饗右大

十 臣以下行向

十日未右大臣雅信家大饗事

十日日本紀略云十日乙未右大臣家大郷食大納

言為光卿以下行向

十三日戊戌女叙位事平

日本紀略云十三日戊戌女叙位

十六日辛丑踏歌節會事

日本紀略云十六日辛丑女踏歌

十七日壬寅射禮事

日本紀略云十七日壬寅射禮

百九十二之二

百九十二之三

十八日癸卯射遺事和若並留之四日丁未新日

日本紀略云十八日癸卯射遺云龍柳於宮

廿日乙巳賭弓事大田籍子射禮柳於宮

日本紀略云廿日乙巳賭弓新日二日丁巳

廿一日丙午政始事

日本紀略云廿一日丙午政始

廿七日壬子除日事新日

日本紀略云廿七日壬子除日始廿八日癸

丑同廿九日甲寅左大臣依物忌不被行除

十日廿日乙卯不被行

十一日二月小丙辰朔

十二日丁巳功課定事

十三日本紀略云二月一日丙辰除日二日丁巳

十四日除日延引依當左大臣諱也但諸卿參入定

十五日受領功課三日戊午除日御物忌諸卿參宿

十六日但文書不籠依時議進覽之四日己未除日

百九十二之三

廿清書了下名

四日己未祈年祭依穢延引事

日本紀略云四日今日祈年祭依内裏穢延

十日引

五日庚申春日祭延引事

十一日本紀略云五日庚申春日祭延引依内穢

也

七日戊戌依祈年祭延引行大祓事

十日日本紀略云七日子戌於八省東廊大掖依  
祈年祭延引

十一日丙寅列見事

日本紀略云十一日丙寅列見

十二日丁卯大原野祭延引事

日本紀略云十二日丁卯大原野祭延引

十八日癸酉祈年祭事

日本紀略云十八日癸酉祈年祭

百九十二之四

廿二日丁丑釋奠并園韓神祭事

日本紀略云廿二日丁丑釋奠園韓神祭

江家次第抄云廉義公當職時下丁釋奠事

天元元年二月廿二日丁丑釋奠

又引海淳記云廉義公關白時下宣言云中

丁有障者可用下丁哉否明經勘申云已謂

用中丁中有障者用下丁有何妨乎即以下

丁祭享

廿四日 己卯 大原野祭事

日本紀畧云廿四日 己酉 大原野祭 按己酉當作己卯

廿八日 癸未 春日祭事 亦云關白御下宣旨云

日本紀畧云廿八日 癸未 春日祭

三月大 乙酉朔

三日 丁卯 御燈事

日本紀畧云三月三日 丁亥 御燈

百九十二之五

百九十二之六

七日 辛卯 擬文章生試事 日本紀畧云十日甲

日本紀畧云七日 辛卯 於式部省有擬文章

生試題云野无遺賢

十日 甲午 殿上賭弓事 日本紀畧云二月廿二日

日本紀畧云十日 甲午 殿上賭弓

十五日 己亥 直物事 日本紀畧云十日

日本紀畧云十五日 己亥 直物

十六日 庚子 復任除日事 日本紀畧云十日



十日日本紀略云十六日庚子直物并復任除日

廿二日丙午石清水臨時祭事

十日日本紀略云廿二日丙午石清水臨時祭右

近中将源正清朝臣為使

十日小右記目錄云貞元三年三月廿二日石清

水臨時祭始用中午  
依雨停舞

廿七日辛卯御讀經事

十日日本紀略云廿七日辛亥御讀經始卅日甲

百九十二之六

寅同竟

是月備前介時望為海賊所殺事

十日日本紀畧云某日從五位下備前介攝時望

為海賊被殺

四月大乙卯朔

四日戊午廣瀨龍田祭事

十日日本紀略云四月四日戊午廣瀨龍田祭

六日庚申平野祭事

六日本紀畧云六日庚申平野祭

七日辛酉擬階奏事

四日本紀畧云七日辛酉擬階奏

八日壬戌灌佛事

日本紀畧云八日壬戌灌佛御導師壽源

十日甲子左大臣女遵子入内事

日本紀畧云十日甲子左大臣二女遵子入

掖庭准女御被免輦按榮花物語為二年非也

百九十二之七

一代要記云皇后藤遵子太政大臣賴忠一

女母中務卿代明親王三女從三位嚴子女

王也貞元三年四月參内

源語秘訣引小右記云天元元年四月十日

左大臣賴忠公一女遵子入内十二日始參上

殿下同參餅四種盛銀盤同盤置同銀箸餅

上置心葉有組納時繪宮口置一覆蓋令持候殿

下御共殿下傳取付加賀典侍令奉之頗有

恐詞未及曉殿下退下姫君曉更退下  
崇屯於於云天元二年にありぬその  
いみひえうみうらふゆわうせなり  
一乃而おとゆをといみうめそ  
とのゆあまふむもたかくぬくふく  
おとゆと梅つ詮子おとゆこのゆを  
うくをうくおとゆとてこのたひの女御  
すこゆお不之の福やいうりくと  
百九十二之八

まといいまれゆあまふう人も  
うらせもゆはた後にならひおもひ  
ゆらなる

十六日 庚午 齋院選子内親王修禊事

十七日 日本紀略云十六日庚午賀茂齋王禊

十七日 辛未 賀茂祭敬言固事

日本紀畧云十七日辛未敬言固廿日甲戌解

十陣

十八日<sup>壬申</sup>左大臣詣賀茂社事

日本紀畧云十八日壬申左大臣參詣賀茂

社

十九日<sup>癸酉</sup>賀茂祭事

日本紀畧云十九日癸酉賀茂祭

政事要略云勘諸祭供奉神事諸司人等行列行路之間觸類可有致敬下馬禮哉否事右賀茂祭日并同社石清水臨時祭日親王

百九十二之九

以下參議以上女御更衣大臣世妻如此權勢之輩為見物共飛軒蓋競立路頭供奉件神事諸司人檢非違使等行列行路之間或渡其門下或過其車前當此之時可有致敬下馬禮哉否同見物之程可下馬之人乘車與可致敬之人相並立者可下哉否者檢神祇令云散齋之內諸司理事如舊致齋唯為祀事得行自餘悉斷說者云神祇者是人主

之所重臣下之所尊祈福祥求永真無不歸  
神祇之德儀制令云在路相遇者三位以下  
遇親王皆下馬以外准拜禮雖應下者陪從  
不下義解云謂車駕陪從依律三后皇太子  
陪從亦同或云應下者乘車不下又儀制令  
云若非元日有應致敬者四位拜一位五位  
拜三位六位拜四位七位拜五位者據此等  
文下馬之法隨位制條但車駕三后皇太子

陪從等雖下之者設不下之文今神祇者君  
之所重臣之所尊也相准其優劣豈輕於人  
間然則供奉之輩不論尊卑只偏勤神祇祭  
禮之事不可求位階致敬之禮又乘車之時  
已非可下並車見物更有何罪勘檢非違使  
於京内城外遇可致敬人之時可下馬哉否  
事右五位六位檢非違使於京内城外遇親  
王太政大臣以下參議以上及四位以上之

時可下馬哉否若可下馬者下馬之後可立  
哉可跪哉者儀制令云在路相遇者三位以  
下遇親王皆下馬以外准拜禮又云若非元  
日有應致敬者四位拜一位五位拜三位六  
位拜四位七位拜五位義解云凡六位公使  
於所使之國遇四位以上國司者不合下馬  
若國司遇詔使者同位以下合下何者下條  
云官人就本國見同位即下何況詔使豈得

輕於國司說者云京職百姓遇職官人者不  
下馬耳為不同國故也名例律云詔使云奉  
勅定名及令諸司差遣是也又儀制令云凡  
在廳座上見親王及太政大臣下座左右大  
臣當司長官即動座以外不動舊說云五位  
以上自牀下立六位以下自座下跪又云會  
集所同耳者案此等文檢非違使所謂詔使  
也至于外國六位之公使雖不可下四位之

國司然以官人於本國下同位國司之文更  
須為國司於所部下同位詔使之法而京職  
百姓逢職官人時為不同國稱不下馬之由  
爰知京與國儀漸殊然則只隨所帶之本位  
致下馬之禮但親王太政大臣猶不類他人  
依廳座例須有下馬立跪之間亦復如此天  
元元年四月廿三日賀茂祭日公子孫大夫  
庶士為丞相公卿多被陵辱其中有或公卿

竊問禮法仍勸此二條即示遣云章條如此  
禮數可知但供奉是公事也全可守法見物  
已私事也苟可隨宜揔免其害豈非上計乎  
卿相服膺感此制言

雷鳴雨冰事

日本紀略云申刻雷鳴雨冰

廿四日寅出羽國進鷹馬大事

廿五日卯覽鷹馬大事

花鳥餘情云小右記云天元元年四月廿五日昨日從出羽國進鷹八聯犬八牙令籠物忌今日御覽侍臣等出之所衆出納等牽犬入自仙花門跪御前令覽畢各牽出其後召犬飼等覽之各牽犬藏人頭蒙勅令班給鷹犬第一御鷹犬等被奉青宮次賜近江供御所次御鷹飼次第相取之於西陣下行此事須奉宮之後給御鷹飼等然後給供御所御

百九十二之十三

四十一

鷹飼者也不知先例欵隨御鷹次第給犬也  
五月小 乙酉朔

一日配皇太后遷御朱雀院事

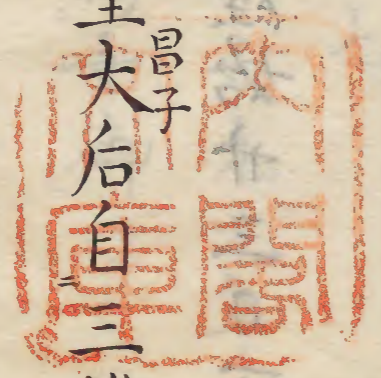
日本紀略云五月一日乙酉皇太后昌子自三條

宮遷御朱雀院

九日癸巳請印宗子內親王等位記事

日本紀略云九日癸巳位記請印三品宗子

內親王四品尊子內親王正四位下嚴子女





王等也按一本嚴子作廳子恐誤

十九日癸卯御惱事

小右記目錄云天元元年五月十九日依御不豫被免侍臣事

廿日甲辰御讀經事

日本紀略云廿日甲辰御讀經始廿三日丁未御讀經竟

廿二日丙午藤原遵子為女御事

日本紀略云廿二日丙午宣旨以藤原遵子為女御按一代要記不注日皇年代記為四月蓋涉入內誤也

大鏡裏書云太皇太后宮遵子天元元年四月十日入內同五月廿二日為女御

六月大甲寅朔

十一日甲子月次祭神今食事

日本紀略云六月十一日甲子月次祭神今食遷宮之後依坎日不御中院仍付諸司

廿一日甲戌大納言兼家勅事後初參內事

公卿補任云大納言正三位藤兼家治部卿

按察使六月廿一日勅事後初參大內按兼家去

年十月以後  
後籠居

七月小 甲申朔

九日壬辰依天變恠異等奉幣十六社事

日本紀略云七月九日壬辰奉幣十六社依

天變恠異太一厄霖旱等也

十一日甲午臨時御讀經事

日本紀略云十一日甲午御讀經

十四日丁酉御盃供事

小右記云長和二年七月三日御讀經中間

御盃供事無所見但承平元年七月十四日

記云此日秋季御讀經始者若御盃供了被

始御讀經歟貞元三年七月十四日臨時御

讀經結願者結願後有御盃事歟云々

十六日己左大臣移職曹司事

日本紀略云十六日己亥關白左大臣御坐

職曹司

廿三日丙午雷震右近陣事

百練抄云七月廿三日雷落右近陣

廿四日丁未雷震陰陽博士晴明宅事

日本紀略云廿四日丁未雷震陰陽博士出

雲晴明宅致破損

廿七日庚戌相撲內取事

日本紀略云廿七日庚戌於東庭相撲內取

廿九日子壬相撲召合事

日本紀略云廿九日子壬子天皇出御南殿相

撲召合

文樗囊抄相撲條云廿九日召合應和元天元

元天元五

八月大 癸丑朔

一日癸丑相撲拔出事

日本紀略云八月一日癸丑相撲拔出

文章生及第事

又云今日文章生及第宣言被下之

五日丁巳釋奠事

日本紀略云五日丁巳釋奠

六日戊午內論議事

日本紀略云六日戊午內論議天皇出御南

殿博士中原有象已下不參候給祿

十一日癸亥定考事

日本紀略云十一日癸亥定考

十六日戊辰御遊事

百練抄云八月十六日於承香殿有御遊興

十延喜昌泰以後久絶

日本紀略云十六日戊辰右大臣以下諸卿

參承香殿女御遵子方奏管絃天皇渡御殿

上侍臣堪絲竹之者應召右大臣歌曲時人  
莫不感歎主上還御之間有獻物

十七日己巳大納言兼家女詮子入内事

日本紀略云十七日己巳大納言藤原兼家

卿息女初入掖庭候梅壺名詮子

按台記為四日大鏡

裏書同  
本書

大鏡裏書云東三條院詮子東三條入道攝

政太政大臣女母贈正一位藤原時姬攝津

百九十二之三十八

守中正朝臣女天元元年八月十七日入内

台記云久安五年八月卅日先日憲榮在憲

泰親等擇申入内日注一紙進宇治陽將日

例天元元年八月四日丙辰東三條院御入

内

崇花物語云九條師輔殿乃三兼家布君兼家之末の了り東

三條乃右大納言詮子なりと云ふ事也此承院志

女起子御起子いとの此を尋ねて云ふことにて

是しちさるるなり申詮子始悉乃由事成ひて

おし先ず不とに圓融乃由くきあま

おはせまといふことおなさるまこと未乃

関兼通白殿よりよりこの始ことおられ申よ

かひ乃みおる皇子ます小宮うけて候を

はくましくおなさるなるなり東三條殿開

白殿との申ことなり何しき成を人あや

未とに思はえさまといふてこの大御成なり

とやとそ由なりなりて大殿おし

いそそ東三條殿と申いふ申この中始き

うらま由あまきんいひりいけはなふのおそ

初しうら由き世と是しと案て人し

おしいそ此りあまきまことおしけし

らせきいせあまはすこの不兼通河殿と東三

條殿と八兵衛院とを為してあまけま

に由わるむ由るなり大殿なり

あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく

百九十二之廿

乃うくておとーしほまにこの大納をばうくたもひ  
うたもあつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく  
あつちのしほりのなまよといふことごとく

遵子

頼忠

中略

ゆゆよなりぬ祓むさうかまで天元元年と  
いふころよハ申文のおと一ゆむ六もあつて  
おとしくかまこと不置ふとのおんんかむきて  
のゆきゆーくふつきなさは東三條のたし  
中宮おあらもてゆつ孝治おとよのむ先  
子みをとせまのとおと一まこと堀河との  
ゆんぬおと一くうのゆよと記のおとく  
ゆゆーかす是ーもちてゆ井らをもて

三  
ゆ川孝治とわりにもえり糸くせゆつ  
あひ何あてたすゆらいと記よおと一ゆま  
申まどうはゆゆーかゆかいつ一ゆりて  
な一きくえあふをむう一乃ゆたさけたさ  
おもいゆまふよとれとことわつふおとさ  
東三條乃女御ハ梅つ不すすをゆふゆ  
さぬあいきやうつきルらつくとゆゆー  
ゆま  
按本書以遵子入内為明年以  
詮子入内為今年冬共誤也



駒引事

樗囊抄駒引條云延引天元元八十七依昨承香殿御遊寬仁元九十三穗坂去十一日依例幣同日不奏解文

是月近衛次將依相撲違亂進急狀事

文在九月

十三日

九月大 癸未朔

三日 乙酉御燈事

日本紀略云九月三日乙酉御燈

九日 辛卯止重陽宴事

日本紀略云九日辛未无重陽宴諸卿於宜

陽殿奏見參按辛未當作辛卯

吉記云平座停止例天祿三年四月一日諸

卿不參無平座貞元三年九月九日上卿不

參無平座

園太曆云平座停止例重陽天元元年九月

九日依御物忌無菊宴又無平座事  
十一日癸巳例幣事

日本紀畧云十一日癸巳天皇幸八省院奉

伊勢例幣

十三日乙未牽信濃望月御馬事

樗囊抄駒引條云於承明門長元三十十九

天元元九十三望月

又云人不參天元元九十三信濃望月將

百九十二之廿三

不參去八月相撲違監依進急狀寮官以下

二參

十七日己亥權律師湛照任東大寺別當事

東大寺別當次第云湛照貞元三年九月十

七日官符

法相宗本寺管原氏法  
縁秩滿替寬監僧都資

天延二年

五月十一日任律師

按僧綱補任寬監作寬  
鑒日本紀畧作寬覽

廿一日癸卯小除日事

日本紀畧云廿一日癸卯小除日

廿二日辰甲辰仁王會事

日本紀略云廿二日甲辰仁王會

十月小癸丑朔

一日癸丑旬事

日本紀略云十月一日癸丑天皇出御南殿

依旬也有音樂

二日甲寅任大臣事

日本紀略云九月廿一日今日大納言兼家

百九十二之廿四

可任右大臣之由有宣告十月二日甲寅天

皇出御南殿任大臣太政大臣賴忠左大臣

雅信右大臣兼家大中納言同被任太政大

臣右大臣家有饗祿

公卿補任云藤賴忠貞元二年四月廿四日

任左大臣同日叙正二位十月十一日詔令

關白万機同日再為氏長者天元元年十月

二日任太政大臣

又云右大臣從二位源雅信皇太子傳十月  
二日任左大臣皇太子傳如元大納言正三  
位藤兼家治部卿按察使十月二日任右大  
臣叙從二位中納言正三位源重信皇太后  
宮大夫十月二日任大納言權中納言從三  
位藤濟時右近大將正月七日叙正三位十  
月二日轉正參議從三位源保光左大辨式  
部大輔近江守十月二日任權中納言

百九十二之廿五

中右記云太政大臣例忠仁公天安元年二月十七日任  
元右大臣五廉義公天元元年十月三日任  
十五○中畧關白左大臣五十五  
抑從昔及今年齒宿老之後任此官歟按三日當  
作二日  
人車記云大入道殿貞元三年十月二日甲  
寅任右大臣天元二年四月十九日丁卯未  
剗著座  
榮花物語云年号かゝりて天元元年と以ゆ

十月二日除目ありて関白頼忠殿を政大臣よなりき

後いぬ左大臣よ雅信のおろしなり後ね東

兼家

三條殿此つともたせぬとかくつをりて

おとす家んえぬとがまふお頼忠るきおとたひ

多むそりしあく屋つこあむむ志大臣よ

なる後ねまふふも佛祿の志さゆふ

おなさるへ

新古今集云冬此は落大將と稱してあり

百九十二之廿六

志と侍るあろし右大臣よありてそり

侍る東三條入道よ関ふ左政大臣よせと

むる物紙字治川のむえぬとろむあけき

りつね水西よ系融院法教昔よりきえきぬ

川のま急るれはむむとろむあけき

五日丁弓場始事

日本紀略云五日丁巳弓場始天皇出御

十一日癸亥子事

十頃集云天元元年十月初の亥日右大臣は  
詮子女御の火をけよとらひくく物とりて内裏  
 の女房小治つとす大は此火桶をとりて  
 を浴ふふ浪して并け子龜の形を浴りて  
 生急さを浴りてくつとまをりて款亥はこの  
 哥を平兼盛の家集より和田は海北の  
 きり山沢おふりいふに記すは  
 多々うえ  
 按今行兼盛集  
 不載亥子歌

百九十二之廿七

十三日丑内膳司有死穢事大膳言云二司穢言中言大

小右記目錄云天元元年十月十三日内膳

仕丁頓死事

依穢召返石清水勅使右大臣兼家事

日本紀略云十三日乙丑右大臣為勅使參

石清水宮有勅自路被召返之今朝内膳司

炊夫頓死之間其穢出來諸陣立札

十五日丁卯除日事

十日本紀略云十五日丁卯除日始十六日戊辰依御物忌除日延引十七日己巳除日

十七日己巳大納言為光等任官事

小右記目錄云天元元年十月十七日小除

日事

公卿補任云大納言從二位藤為光中宮大

夫十月十七日兼按察使參議正四位下藤

十為輔右大辨十月十七日轉左大辨

百九十二之廿八

又云江齊光天延四正七叙正四下貞元二

四廿四補藏人頭同十二月九日任民部權

大輔三十七任右大弁

一代要記云參議藤佐理正四位下左中辨

兼內藏頭天元元年十月十七日任按補任脫任除

日

廿一日酉癸叡山僧徒賀太政大臣賴忠拜除事

日本紀略云廿一日癸酉延曆寺座主以下

賀太政大臣廿六日癸酉並廿七日甲戌並廿八日乙亥並廿九日丙子

廿八日庚辰皇太后還御三條宮事皇太后御幸

日本紀畧云廿八日庚辰皇太后宮自朱雀

院還御三條宮諸卿以下有饗祿御幸

十一月大壬午朔

一日壬午御曆奏上卿不參事

園太曆云御曆奏上卿不參付内侍所例天

元元年十一月一日上卿不參御曆付内侍

百九十二之廿九

五所御幸

樗囊抄御曆奏條云上卿不參天元元付内

侍所嘉保元同御幸

於叡山修忠義公周忌態事御幸

日本紀略云十一月一日壬午今日於天台

楞嚴院被修太政大臣周忌法事御幸

四日乙酉藤原詮子為女御事御幸

日本紀略云四日乙酉以藤原詮子為女御



按又見大鏡裏  
書女院記等

女院小傳云東三條院藤詮子圓融后一條

母東三條關白兼家第二女貞元三十一月

四日為女御

一代要記云女御正四位下藤詮子太政大

臣兼家二女母攝津守中正朝臣女貞元三

年八月參内十一月為女御

五日丙戌直物并小除日事

百九十二之卅

日本紀略云五日丙戌直物今泉到天皇

小右記目錄云天元元年十一月五日直物

并小除日事

十五日丙申平野春日祭事

日本紀略云十五日丙申平野春日祭

十六日丁酉賀茂臨時祭調樂事

小右記目錄云天元元年十一月十六日臨

時祭調樂事

廿日辛丑地震事

日本紀略云廿日辛丑地震一月廿六日

園韓神祭事

又云今日園韓神祭丙申平惟春日祭

冷泉皇子居貞為親王事

大鏡裏書云三條院天元元年十一月廿日

為親王三年

日本紀略云三條院諱居貞冷泉院天皇第

二子也母故女御從四位上藤原朝臣超子

故入道太政大臣兼家朝臣之女也天皇貞

元元年丙子月日誕生三年十一月廿日為親

王

帝王編年記云三條院諱居貞冷泉院第二皇

子母贈皇太后藤超子東三條入道攝政兼家公

二女也天延四年丙子正月三日庚午誕生

貞元三年戊寅十一月廿日辛丑親王宣旨

太政大臣上表事十一月廿日辛丑藤原實資

日本紀略云今日太政大臣上表使左近權

少將藤原實資

覽五節舞姬事

又云今夜五節舞姬參一品資子內親王參

議源忠清同惟正左少辨平季明等也

廿一日

壬寅

內裏并皇太后宮鎮魂祭事

日本紀略云廿一日壬寅鎮魂祭皇太后宮

百九十二之廿二

同祭

賜勅答於太政大臣事

又云今日太政大臣表勅答大內記菅原資

忠作云

廿二日

癸卯

新嘗祭事

日本紀略云廿二日癸卯新嘗會天皇幸中

院

廿三日

甲辰

新嘗會事

日本紀略云廿三日甲辰節會天皇出御南殿

小右記云寬仁二年十一月廿二日今日節會藏人頭右中弁定賴仰云小忌上不參引列之例可問外記者召大外記文義問其例申云貞元三年長保元年有其例者

廿八日己酉賀茂臨時祭事

日本紀畧云廿八日己酉賀茂臨時祭

小右記目錄云廿八日臨時祭事  
聽為平親王輦車事

日本紀畧云式部卿為平親王聽乘輦出入官門

廿九日庚戌改元事

改元部類云不知記云貞元三年十一月廿九日庚戌左大臣來著左伏座被始行官奏事其儀如恒次左大臣大納言已下著同座

被行改元事

改貞元三年為天元元年○按公卿補任元亨釋書和漢合符

為四月十三日扶桑略記一說百練抄愚管抄帝王編年記皇年代記歷代皇紀元秘別錄東寺長者補任為四月十五日一代要記為五月七日如是院年代記為同月十五日皆誤也類聚符宣抄補長殿勾當職宣旨有貞元三年十一月廿八日之文今日以前不改元可  
以徵

扶桑略記云十一月十九日改為天元元年

一云四月十五日改元

日本紀略云廿九日庚戌詔改元為天元元年

年依明年陽五之御慎也大赦天下老人賜穀有差

一代要記云天元元年戊寅五月七日改元

依天變也

皇年代記云貞元三年四月十五日改元依

災變也

元秘別錄云貞元三年四月十五日改元為

天元依災變之上太一陽五厄也

天十二月小 壬子朔

十九日 庚午 季御讀經事

日本紀畧云十二月十九日庚午季御讀經

始百僧皆候南殿廿二日癸酉同竟

小右記目錄云天元元年十二月十九日秋

季御讀經事

是月宇多皇女成子内親王薨事

日本紀略云某日入道四品成子内親王薨

百九十二之卅五

宇多院第五女

又云天德元年二月廿三日辛巳四品成子

内親王落髮

一代要記云成子内親王天德元年出家天

延元年正月叙四品貞元三年薨

是年始差御馬使事

樗囊抄駒引條云御馬使左近番長兼國貞

元三始之右馬允橘賴輔承保二

拾芥抄云御馬使貞元三年左近番長尾張

兼國始之云云

天台座主良源經始根本中堂事

九院佛閣抄云根本中堂法性房贈僧正治尊意

山之時承平五年三月五日未刻此堂燒亡

畢其後第十八之座主慈惠良源大師御時造之

自天元元年造營同三年九月三日設齋會

供養之

天台座主記云良源天元三年庚辰九月卅日

修中堂會中堂者始自天元元年新造加孫

庇迴廊中門等其間今年先造前唐院又移

作根本經藏寶藏是欲令作中堂迴廊中門

等平地最狹仍以南岸土為填北谷也即如

念造作終功

權律師寬徹入滅事

僧綱補任云寬徹天台宗貞元二年十月五

延曆寺

日任權律師年七十一寬平禪定聖主御弟

子花山僧正苗裔良岑氏延長二年六月八

日得度受戒去四月八日依良源奏為延曆

寺阿闍梨天元元年月日卒七十或本四年

卒本

明匠略傳慈惠大師傳云貞元二年和尚依

堀川大相魚通國重病修熾盛光法修中平復歡

喜無比帝皇降勅任權僧正阿闍梨伴僧并

百九十二之廿七

百九十二之廿八

廿二人給度者又伴僧之冲寬倣圓賀兩阿

闍梨任權律師是異例也按又見天台座主記

僧真覺入滅傳云

扶桑略記云貞元三年延曆寺沙門真覺入

滅權中納言藤原敦忠卿第四男也初在俗

時官歷右兵衛佐云已上出往生傳○按

樂記同本書蓋本書除没年之外盡據往

生記文記之故說相合也今無所考定

尊卑久脈敦忠男佐理右兵衛佐正五下按



綱補任作助雅  
以同訓誤也

往生極樂記云延曆寺沙門真覺者權中納

言藤原敦忠卿第四男也初在俗時官歷右

兵衛佐康保四年出家從師受兩界法阿彌

陀供養法三時是修一生不廢臨終之時有

微病相語同法等曰有尾長白鳥囀曰去來

去來即向西飛去又曰閉目則極樂之相髣

髴現前入滅之日誓願曰我十二箇年所修

善根今日總以廻向極樂入滅之夜三人同

夢衆僧上龍頭舟來相迎而去按又見今昔物語

荏柄天神緣起云延喜九年三月平院のお

於や之孫不さゆこれ法新も志すなり於而慶

慶頼

孫也又清女女清法孫の東宮と又一男八條

大将保忠三男敦忠中納言い法ま山く孫り以

うせ孫不ける古大臣顯忠れのこ了れ二位れ

大臣すをるせ孫きりる是を菅至相れ法

事と物くむを多し給く大臣亦て六年まで  
おひしゆしきれとも法ありきしを所前  
を了ふも包しただゆすを路はよおれを  
て多疾よ後巫おを新意しあをきてり  
おけしきるけ家の人をれも併道ふ守る  
君達のこも傍於法中傍正もなり給け家  
三井ちれ公登典福ちれ枝公石菰の文慶  
なれこの由は唐のいしりかてけ家ハ敦忠れ

百九十二之廿九

三男兵衛佐依理一家のみ福をおもひつゝねて  
世中あちれをしとて出家入及して往生し  
多れのとてせがしりくは實われ  
至大僧都住  
石蔵大雲寺  
按文慶者佐  
理之二子官  
培吟日記云七月尔ある里わうしは候し多承の佐  
すしりしりわく思物りありけとなれよ  
あやしめ致とうちまうて山よとておのりて  
ほうしふありになをあるは美しとれり

阿はまといふ不くに女をすしつて阿子よなりぬて  
きくさるくはまも物さうよと一れとさく仲よ  
ていよあといは阿はむ一兼、まをいぬらふた  
やふれおしひやまこま一那一きよははるあま  
ををれうるあまなり、ひいさるうらひるり  
志中志了案山涼く入ふ一人城ふりぬと  
たふ阿子くもれよとふ志をるまといあむ素  
いふつる

按佐理妻民部卿文  
範女也生男邦明

朝野群載藤原明子款状云妾所生男有三  
人長子佐時次子佐理少子延曆寺僧明昭  
是也明昭少登台嶺早為比丘佐理復辭右  
兵衛佐腰解龍泉心入鷲窟報恩雖說真實  
之理至孝皆忘白華之篇按本朝文粹亦載  
之全文在貞元元  
年二  
月二  
大雲寺縁起云帝都北岩蔵山大雲寺者人  
王六十四代之帝圓融院御願日野中納言

文範卿草創也勅使中納言敦忠卿本願真  
覺上人造營之本尊者行基菩薩之御作金  
色等身十一面觀音桓武天皇仙洞御安置  
相繼本院左時平大臣感得也彼室家藤原明子  
之時依勅定大雲寺江之御遷座本堂同仙  
洞之舊宮引移智證大師流之灌頂堂是也  
按明子者敦忠之妻而佐理  
母也本書以為時平妻誤矣

史料卷之百九十二  
源忠常書

淨書弘賀  
百九十二之四十一

